様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　５ 月 ３０ 日現在

機関番号：１４４０１
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2017～2022
課題番号：１７Ｋ１３４４２

研究課題名（和文）インド北東部におけるボム語の調査と文法記述

研究課題名（英文）A Linguistic Survey of Bawm

研究代表者
大塚　行誠（Otsuka, Kosei）

大阪大学・大学院人文学研究科（外国学専攻、日本学専攻）・准教授

研究者番号：９０６１２９３７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：ボム語は、チベット・ビルマ語派チン語支の中部チン語群に属する少数言語であり、インド北東部のほか、ミャンマー西部、バングラデシュ南東部などでも話されている。本研究期間中、研究代表者は、インドのミゾラム州とミャンマーに渡航し、現地でボム語を始めとする様々なチン系言語の記述言語学的な調査を行った。現在は現地で得られたデータをもとに、音韻と語彙の分析、文法の記述を進めている。
さらに、ボム語と同系統のティディム・チン語やアショー・チン語などのチン系言語の調査も行っている。ボム語との対照的観点から方向接辞などの文法現象を調べたほか、名詞修飾構造や言語接触についても研究会や論文などで発表している。

研究成果の学術的意義や社会的意義
様々な情報が行き交う現代においてもインドとミャンマーの国境地帯の言語と文化に関する学術的資料や現地の調査報告は少ない状況にある。特に、この地域では50を超える数のチン系の言語が話されているが、その多くの音韻、語彙、文法の詳細が未だ明らかにされていない。本研究を通じ、チン系言語と近隣のチベット・ビルマ語派の諸言語との関係を明らかにしてこの地域の言語学的理解を深め、多言語多文化社会であるインドとミャンマーの現状を具体的に描き出すべく、現地でのフィールドワークを主とした調査と研究を進めている。

研究成果の概要（英文）：Bawm is a minority Chin language belonging to the Central Chin group of the Chin branch of the Tibeto-Burman languages and is spoken in northeastern India as well as western Myanmar and southeastern Bangladesh.
During the period of this project, the researcher was based in Mizoram, India, and Myanmar, and conducted descriptive linguistic research on several Chin languages, including Bawm, in the field.
He is currently working on phonological, lexical and grammatical descriptions based on data collected in the field.
He is also conducting a survey of other Chin languages, such as Tiddim Chin and Asho Chin, which share the same linguistic stock as Bawm. In addition to studying grammatical phenomena such as directional affixes from a contrastive perspective with Bawm, he has presented his findings on noun modification structures and language contact in workshops and papers.

研究分野：言語学

キーワード：記述言語学

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

ボム語 (Bawm: ISO 639-3 bgr) は、チベット・ビルマ語派チン語支の中部チン語群に属しており、ボム・チン語 (Bawm Chin) とも呼ばれている。ボム語を母語とする話者のコミュニティーは、インド共和国北東部のミゾラム州のほか、ミャンマー連邦共和国西部のザガイン管区、チン州、アラカン州、そして、バングラデシュ人民共和国東部のチッタゴン丘陵の広い地域に点在している。

インド側のボム語話者はミゾ語（ボム語と同じ中部チン語群に属する言語であり、ミゾラム州の州公用語）、ミャンマー側のボム語話者はビルマ語（ミャンマーの公用語）、バングラデシュ側のボム語話者はベンガル語（バングラデシュの公用語）を第二言語とするバイリンガルとなっている。ミゾ語やビルマ語、ベンガル語は、ボム語に比べると、現地の政治、経済、文化の面で圧倒的に優位な状況にあり、ボム語を母語とする話者は社会的にもマイノリティの立場に置かれている。現在の推定話者数は 15,140 人程度である (Eberhard eds. 2022: 60, 126, 282)。

ボム語をはじめ、チン語支の諸言語に見られる文法的特徴は、いわゆるビルマ系の対格型言語とチベット系の能格型言語の間を埋める特徴を示し、チベット・ビルマ語派の比較言語研究および語彙形式の分布からも欠かすことのできない材料を提供すると考えられている (西田 1989: 995)。しかし、西田 (1989) の指摘にもある通り、チン語支における記述言語学的な研究は未だ初期的な段階にあり、チン語支に属する言語の詳細な文法記述も少ないのが現状である。その為、ボム語およびその周辺地域で話されているチン系言語の記述言語学的調査を通して、チベット・ビルマ語派の系統分類に関する研究と言語類型論の発展にも貢献すべく本研究を開始した。

参考文献：

Eberhard, David M., Gary F.Simons, and Charles D Fennig (eds.) (2022) *Ethnologue: Languages of Asia.* Twenty-Fifth Edition. Dallas: SIL International.

西田龍雄 (1989) 「チン語支」亀井孝・河野六郎・千野栄一（編）『言語学大辞典　世界言語編（中）』2: 995-1008. 東京. 三省堂.

２．研究の目的

研究代表者が主な研究の対象としているのは、チベット・ビルマ語派チン語支に属する諸言語、すなわちチン系言語であり、ボム語もそのひとつである。本研究の目的は、インド北東部とミャンマーで、ボム語を始めとしたチン系言語の調査を行い、音韻と文法を記述することである。

数多くのチン系言語が話されているインドとミャンマーの国境地帯は 2011 年まで外国人の入域が厳しく制限されていた。その規制のために、外国人研究者が入域して長期間に渡り調査することもほぼ不可能な状況にあった。しかし、2012 年からこの入域規制が徐々に撤廃されていき、特にミャンマー側では外国人研究者でも比較的自由に入域することが可能となった。インド側でも規制が徐々に緩和される傾向にあったため、両国でボム語を中心としたチン系言語の記述言語学的な調査を始めた。現地調査に基づくチン系言語の参照文法書が完成すれば、インド、ミャンマー、バングラデシュ 3 か国における少数言語研究に与えるインパクトも大きいと考えており、コロナ禍により長期間の中断があった後もミャンマーでのフィールドワークを再開し、ボム語をはじめとしたチン系言語の調査を進めている。

３．研究の方法

研究代表者は、10 年以上に渡るミャンマーでのフィールドワークの経験があり、本務校でもビルマ語教育を専門として行っている。その為、ビルマ語の運用能力は比較的高く、ミャンマーの現地事情にも精通していると言える。さらに、2012 年にインドのミゾラム大学に 3 か月間留学し、ミゾラム州でラルテー語をはじめとしたチン系少数言語の調査を行ったこともある。

そこで、インド北東部とミャンマーを中心としながら、フィールドワークを行った。現地調査では、Reichle (1981) と S.L. Pardo (2007) などのボム語に関する先行文献資料を基に、ボム語を母語とする調査協力者へのインタビューを行った。本研究期間の前半ではインドのミゾラム州で調査を行っていたが、現地調査協力者の事情により言語調査を安定した形で継続していくことが難しくなった為、研究期間の後半ではミャンマーのボム語話者に協力を依頼し、ビルマ語を媒介言語としながらボム語の調査を実施した。

現地調査では、ボム語の基礎語彙および文法について聞き取りを行い、その音声を収録した。ボム語には声調があるものの、正書法上では表記されない。さらに、複雑な声調交替などを持っていると考えられるため、音声収録には細心の注意を払って調査を行った。

最終的な目標としてボム語のデータに文法情報と音声データを付したデータを公開する予定であったが、新型コロナウイルスの感染拡大とミャンマーの政情不安と現地の治安上の問題によって長期間に渡って中断を余儀なくされた。現在も追加調査および言語データの最終確認ができておらず、大幅に調査が遅れる形での研究期間終了となった。2023 年 3 月にミャンマーへの渡航と限定的な調査を再開することができたものの、現地情勢はますます悪化し、以前のような環境下で自由に調査を行うことが難しくなっていた。その為、現在は調査協力者と調査計画の見直しと今後の予定の調整について打ち合わせをしている。

特にコロナ禍においては海外渡航が難しかったことから、ボム語と系統を同じくするチン系言語のラルテー語、ティディム・チン語やアショー・チン語のデータを用いた調査と発表を行った。次節にその研究成果の一部を掲載する。

参考文献：

Reichle, Verena (1981) *Bawm Language and Lore: Tibeto-Burman Area*. Bern: Peter Lang.

S.L. Pardo (2007) *A grammar and dictionary of the Bawm language.* Bandarban: Dr. James Zabiakthang Bâwm.

４．研究成果

（１）インド共和国ミゾラム州アイゾール市のボンコーン地区およびミャンマー連邦共和国のヤンゴンとカレーミョで調査協力者と会い、現地でボム語の基礎語彙と基本文法に関する聞き取り調査を行った。さらに、インドとミャンマーのほか、バングラデシュを訪問し、ボム語およびその話者の社会と文化に関する資料と文献を収集した。

（２）基礎語彙調査の結果、各語の母音と子音については先行研究にあるデータとほぼ同じものになった。しかし、声調については、ボム語正書法や先行研究に声調表記が無かったことから、現在声調交替の分析もしながら声調を記す作業を行っている。今後、周辺のチン系言語との対照語彙リストとしてボム語の声調記号付きの基礎語彙データを公開する予定である。

（３）ボム語を含め、多くのチン系言語では、１つの動詞語根につき、「形式Ⅰ」や「形式Ⅱ」

という２つの動詞語幹を持つ動詞が少なくない。その為、基礎語彙調査でもそれぞれの動詞の語幹形式を調べている。

ボム語においても、ティディム・チン語など、他のチン系言語と類似した形態統語的条件下で動詞語幹の交替が生じていることが分かった。例えば、名詞修飾における動詞語幹の交替は、ティディム･チン語とボム語の両方で共通して見られる特徴である。すなわち、名詞修飾において、被修飾名詞が名詞修飾節中の主語にあたる場合、名詞修飾節中の述語動詞は形式Ｉの語幹で現れる。一方、被修飾名詞が名詞修飾節中の主語にあたらない場合は名詞修飾節中の述語動詞は形式Ⅱのほうの語幹で現れる。この文法現象自体については、ティディム・チン語の名詞修飾に関する論文で詳述している。

（４）ボム語の来辞について、北部チン語群のティディム・チン語とよく似た現象が見られた。ボム語の来辞もティディム・チン語の来辞も ong であり、形態的に似ているが、統語的にもよく似ているのである。どちらの言語においても来辞は言語行為参与者および直示的中心に向かう移動を主に表すが、ティディム・チン語の場合は、これが文法化し、一人称または二人称を目的語とする場合、必ず動詞に来辞を付加するようになっている。一方、ボム語においても、一人称を目的語とする場合には来辞を付加することが多く、義務的ともとらえられるようなケースが見られる。このような現象は、ボム語と非常に近い関係にあるハカ・チン語には見られない点で興味深い。ボム語の来辞の機能については更なる調査と検討が必要であるが、この逆行態標識のような機能を持つ来辞については、ティディム・チン語の方向接辞に関する論文の中で紹介している。

（５）ミャンマーでのフィールドワークを通し、ボム語がハカ・チン語とよく似たことばとして現地のコミュニティーの中では知られており、実際にボム語話者とハカ・チン語話者が相互での意思疎通を行うことも可能であることが分かった。ミャンマー西部のカレーミョという町にあるキリスト教会では、ボム語を母語とする牧師がハカ・チン語の信者にハカ・チン語で説教をしていたが、牧師は、たとえボム語で話しても、（声調や一部の語彙は異なるものの）ハカ・チン語話者はその内容の大半を理解することができると指摘した。研究代表者は日本国内でハカ・チン語やファラム・チン語など、ミャンマーで話されている中部チン系言語の簡単な調査も行っている。現地の情勢が再び安定し、ミャンマー西部でのフィールドワークが可能になってからは、言語接触や話者コミュニティーの形成過程についてもさらに詳しく調べ、社会言語学的な観点から考察を行いたいと考えている。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 John C. Maher, Otsuka Kosei	４．巻 -
２．論文標題 Chapter 15 Burmese: Refugees and Little Yangon	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Language Communities in Japan	６．最初と最後の頁 156-163
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.1093/oso/9780198856610.001.0001	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 Otsuka Kosei	４．巻 3
２．論文標題 Directional Prefixes in Tiddim Chin	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Grammatical Phenomena of Sino-Tibetan languages	６．最初と最後の頁 197-210
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大塚　行誠	４．巻 20
２．論文標題 ラルテー語の音韻とクキ・チン祖語	５．発行年 2021年
３．雑誌名 ありあけ : 熊本大学言語学論集	６．最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 大塚行誠	４．巻 45
２．論文標題 ラルテー語における動詞語幹の交替	５．発行年 2019年
３．雑誌名 言語文化研究	６．最初と最後の頁 161-178
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 大塚行誠	4．巻 -
2．論文標題 ティディム・チン語の名詞修飾表現	5．発行年 2020年
3．雑誌名 日本語と世界の言語の名詞修飾表現	6．最初と最後の頁 303-322
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計7件（うち招待講演　0件／うち国際学会　6件）

1．発表者名 Otsuka Kosei
2．発表標題 Lexical borrowing in Asho Chin
3．学会等名 2nd Workshop on Linguistic and Cultural Diversity in the Northeast India - Myanmar - Southwest China region（国際学会）
4．発表年 2021年

1．発表者名 OTSUKA, Kosei
2．発表標題 The Influence of Burmese on Asho Chin Grammar.
3．学会等名 Workshop on linguistic and cultural diversity in the Northeast India-Myanmar-Southwest China region.（国際学会）
4．発表年 2019年

1．発表者名 OTSUKA, Kosei
2．発表標題 Burmese loanwords in Asho Chin.
3．学会等名 TaLK (Theoretical Linguistics at Keio) 2019: Myanmar Linguistics, State of the Art.（国際学会）
4．発表年 2019年

１．発表者名 Kosei OTSUKA
２．発表標題 The structure of verb complexes in Asho Chin
３．学会等名 The 51st International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Jeremy PERKINS, Julian VILLEGAS, Seunghun J. LEE, Kosei OTSUKA
２．発表標題 Using psychoacoustic roughness to measure creakiness in Burmese. The 5th NINJAL International Conference on Phonetics and Phonology
３．学会等名 The 5th NINJAL International Conference on Phonetics and Phonology（国際学会）
４．発表年 2018年

１．発表者名 Kosei OTSUKA, Keita KURABE
２．発表標題 The cis- and translocative prefixes in Tiddim Chin and Jinghpaw
３．学会等名 International Workshop Directional Prefix in Tibeto-Burman Languages（国際学会）
４．発表年 2019年

１．発表者名 大塚行誠
２．発表標題 ティディム・チン語とジンポー語における方向接辞の対照
３．学会等名 日本言語学会第155回大会
４．発表年 2017年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関